

けやきとともに

☆ 大分合同新聞社 (文：田崎啓三、写真：椎原新二)

① 廃校の小学校に別れの歌

タクシーで通学／歩けば2時間も／最後の語り部に

② お年寄りも感動の合唱

「学校ができた」／今も姫岳に残り／産めよ、増やせよ

③ ベビーブームに沸くムラ

野球、おにごっこ／戦地から続々と／働く場所がない

④ 台風水害で地区に別れ

エノハ泳ぐ清流／複式にとまどい／「わすれないで」

⑤ 心触れ合う合同運動会

優しい子に育つ／「手本になろう」／「地域の学校」に

⑥ 統合で得たものの失ったもの

今も「複式学級」／男友達ができた／近い“心の距離”

⑦ 新たなよりどころ探して

豊かさ教えたい／反対運動起きず／“新しい空気”も

はじめに

今、地方はひん死の状態にある。
過疎化と高齢化の波がムラを次々にのみ込んでいる。

高度経済成長の階段を駆け上り始めた1960年代以降、
日本社会は全国津々浦々から
数知れないムラ人たちを、
都会へ、都会へ、と駆り立てていった。

人がいなくなったムラには、荒れた田畑や山林が残され、
集落の崩壊、消滅がじわじわと進行している。

その一方では、
新天地を求めて都会からムラへ移り住む「新田舎人」たちの姿も目立つ。

過疎市町村の比率が全国一高い過疎大県・大分の
今と明日を見つめながら、地域社会再生への道を探る

1999年10月17日

●デジタル版「新田舎宣言」について

「新田舎宣言—地域社会再生へのアプローチ」
は、大分合同新聞が1999年10月17日から
翌2000年7月1日にかけて掲載した全9部
56篇の連載記事。今回、連載当時の記事と写
真を原則そのままに、デジタルブックとして再
構成しました。登場人物の年齢をはじめ文中の
記述内容は、連載時点のものです。

2008年10月10日

NAN-NAN 事務局

1 廃校の小学校に別れの歌

1999年11月22日

■タクシーで通学

大分、熊本、宮崎三県の県境に近い祖母山ろく。竹田市の南部に神原（こうばる）地区がある。祖母の峰々の黒い肩越しに角度の浅い朝日が差し込んでくる。

「おはようございます」。日の光が当たり始めたばかりの神原川沿いの狭い道に、子どもたちの声がこだまする。小学校6年生と2年生の男の子。2人を乗せたワンボックスカーが走り出した。田んぼと杉林に囲まれた四つ角で止まった。

消防団のポンプ小屋の中から、6年生の男女3人と幼稚園児の男の子が元気よく飛び出してきた。来た道を少し戻ると、今度は1年生の女の子が1人。家族に見送られながら乗り込んできた。ワンボックスカーは、タクシー会社からの借り上げ。子



どもたちの通学の足として、毎日送り迎えしている。1年生の女の子を最後に、「神原・中角コース」の7人がそろった。通学タクシーの車内はにぎやかだ。前夜のテレビの話で盛り上がる。ふとしたことから6年生の男女2人が言い争いを始めた。「夫婦げんかはやめろって」。周りが冷やかす。車内のにぎやかさとは対照的に、通学タクシーはひっそりとした溪谷と田園地帯を走り抜け、小学校の校庭に着いた。

4月から。神原地区にあった嫗岳（うばだけ）小学校と門田地区の入田小学校が統合された。新校名は祖峰小学校。校舎は入田小の校舎をそのまま利用している。

■歩けば2時間も

タクシー通学が始まったのは、1999（平成11）年

祖峰小に通学する子どもたち。静かな溪谷のにぎやかなタクシーが走る



姫岳小に通っていた神原、申角、田井、倉木の四地区の子どもたち20人は全員、タクシー通学。歩けば子どもの足で2時間前後。タクシーだと10分から20分。費用は市が全額負担する。

統合前は姫岳小が23人、入田小は26人。両校とも、二つの学年が一つの教室で学ぶ複式学級が、それぞれ2クラスずつという過小規模校になっていた。

竹田市では現在、学校統合計画が進んでいる。98年度当初に11校あった小学校を、2002年度までに5校に統合する計画だ。両校の統合はその第一弾だった。

■最後の語り部に

廃校になった姫岳小は、神原地区横平の高台にある。ケヤキの大木が1本、校門の前に残っている。開校時に植えたものと伝えられる。79年間、ケヤキは子どもたちを見守ってきた。

99年3月27日、姫岳小は閉校式の日を迎

えた。学校に別れを告げる手づくりの歌を、全校児童が合唱した。

音楽物語「けやきとともに」―当時、障害児学級を受け持っていた甲斐淳子先生（現久住町白丹小教諭）と、子どもたちが一緒になって作った。

「自分がケヤキだったらどう思う」。甲斐先生の問い掛けから、歌詞づくりが始まった。「自分の周りからだれもいなくなるケヤキの気持ちになったつもりで、子どもたちに考えてもらった。あの子たちは学校の歴史を語る最後の語り部。親や地域の人に聞いて調べた学校の歴史も歌詞にした」。

閉校式は盛大だった。姫岳小の卒業生や教壇に立った先生たち約300人。姫岳を離れて大分市や福岡、熊本などに住む卒業生も戻ってきた。歌が最後のパート「けやきとともに」に差しかかるころ、会場のあちこちからすすり泣く声が聞こえてきた。

2 お年寄りも感動の合唱

1999年11月23日

■「学校ができた」

1999（平成11）年3月に廃校になった竹田市姫岳（うばだけ）小学校。

閉校式で全校児童が歌った音楽物語「けやきとともに」は、父母や卒業生、地域の人たちに大きな感動を与えた。学校の歴史と思い出が、朗読と合唱でつづられていく。

（朗読）わたしはケヤキ。この学校を79年間見続けてきた。1872（明治5）年の姫岳村。神原にはじめての学校が児童12名で始まった。続いて倉木にも学校ができた。そして1920年。ここ横平に二つの学校を一緒にした姫岳尋常小学校ができた。

（合唱）「学校ができた」

学校ができた学校ができた／祖母が見える
赤土の台地に／学校ができた

202名の子どもたち／汗をふきふき坂道
登ってやってくる／背中のふろしきおに
ぎり3個／ふろしきしょってやって来る
みんなの声を聞きながら大きくなる／学
校の見える校門の前／おおきなケヤキの
木になろう／おおきな木になろう／おお
きな木になろう／枝を広げてみんなが集
まる／おおきなケヤキの木になろう

1921（大正10）年に卒業した第1回卒業生の名簿に、阿南達見さん（93）の名前がある。姫岳に残って、今もシイタケを作っている。阿南さんは横平の新しい学校に、高等科2年の2学期から通った。

■今も姫岳に残り

「神原の学校は草ぶきで教室が二つしかない

粗末な造りだった。新しい学校は立派な建物で、屋根は厚紙にコールタールを塗った便利がわらだったが、雨が漏るのですぐかわらに変わった」。

(朗読) 1941年12月8日「太平洋戦争」が
 始まった。ここ姫岳にもだんだん聞こえてくるようになった。戦争の足音。

(合唱)「そしてだれも」

校庭がなくなった／校庭がなくなった／夏
 になったら芋畑／冬になったら麦畑

(朗読) B29 空襲警報。子どもたちは裏山の防空壕（ごう）に入っていく。

(合唱)「旧校歌」

はてなきながめ／吾がほこり／清く豊け
 き峰を負い／霊気みなぎるまなびやに／
 雄々しくおいたつ／三百余

(朗読) 校歌も変わった。そして子どもたちが、そしてだれもいなくなった。みんな、みんな、戦争に奪われた。

旧校歌の部分は、地区のお年寄り8人が合唱を買って出た。

そのうちの1人、阿南ヒサコさん(75)は、二・二六事件が起きた36(昭和11)年に卒業した。

■産めよ、増やせよ

「毎日朝礼があった。国旗を掲揚し、校歌を歌いながらめいめいの教室に入った。入学当時の児童は200人と(旧校歌では)歌っていたが、卒業する時は300人に変わっていた」。

姫岳尋常小の児童は16年間で、いっきに100人ほど増えた。

「産めよ、増やせよ」のかけ声が、勇ましく叫ばれていた時代だった。

「子どもたちの歌を聞いていたら、校門に入っていく時の様子を思い出した。ケヤキの周りには桜があった。いい思い出ができた。めい土へのよい土産です」。

閉校式から4カ月が過ぎた8月15日夜。地

域の人たちのための願いがかなって、姫岳小旧校舎で「けやきとともに」が再演された。舞

台の隅っこの方に、ちょこんと一人腰掛けて、旧校歌を歌う阿南さんの姿があった。



「いい思い出ができた」。音楽物語で合唱を買って出た阿南ヒサコさん

3 ベビーブームに沸くムラ

1999年11月24日

■野球、おにごっこ

廃校になった竹田市姫岳小学校の音楽物語「けやきとともに」は、さらに続く。戦後日本のベビーブームから過疎化、少子化までのムラの歴史を、歌い、つづっていく。

(朗読) 1945年8月15日、戦争は終わった。

戦争がやっと終わった。芋畑が運動場に戻った。運動場に戻ってきた。子どもたち。楽しそうに野球をしている。子どもたち。わたしの木陰でおにごっこをしている。子どもたち。

11月17日、祖母山は今年の冬2回目の雪をかぶっていた。この日、姫岳小の跡地で「穴森サミット」があった。

地元から出席した三田井昇さん(67)と吉川

惟治さん(66)は、懐かしそうに学校の敷地を見渡した。「旧校舎のあるところが校庭だった。戦時中は大豆や芋を植えていたので、運動する場所はちょっとしかなかった」。

戦争が終わるとすぐに、子どもたちは校庭で野球を始めた。「グラブは、戦時中に使っていたテントの布を縫い合わせた手製」「軟式のボールはすぐにだめになった」。やんちゃだったころを思い出して、2人は顔を見合わせた。

■戦地から続々と

(朗読) 1954年、町村合併で竹田市が誕生し、姫岳村も仲間入り。「竹田市立姫岳小学校」になった。子どもの数もどんどん増えて1956年、10クラス347名。教室が足りなくなって新しい校舎もできた。滑り台、



鉄棒、ジャングルジム、うんてい。
たくさんの遊具もできた。

戦地に出征していたムラの男たちが、次々に戻ってきた。大陸からの引き揚げ者も入植した。食糧難で、街で暮らす人たちは食べるものにも事欠いた時代。農業地帯の姫岳は、食べるのに不自由はなく、活気があった。

当時の名子自治会は28世帯。第一次ベビーブームの48年から49年にかけて、同じ学年の子どもが12人生まれた。後藤マツ子さん（75）も、49年3月に長女を産んだ。

「あのころは近所で出会う人がみんな、大きな腹を抱えていた。互いの家の田植えを助け合う共同作業の“手間換え”の

79年間、子どもたちの成長を見つめてきたケヤキ（旧姫岳小学校の校門前）

時なんか、田んぼにずらっと、腹の大きい人が並んでいた」。

後藤さんの長女が通っていた59年当時、嫗岳小の児童数は402人。「子どもたちが家の周囲を走り回るので草が伸びず、草取りをしないでよかった」と言うほど。最もにぎやかな時代だった。

■働く場所がない

(朗読) 1964年、9クラス302名。1970年、7クラス168名。にぎやかだった学校がさみしくなってきた。

後藤さんの長女の同級生で、名子に残っているのは2人だけ。その一人、市内の建設会社に勤める入田正司さん(51)。高校卒業後、大阪などで働いていたが、年を取った母親の面倒を見ようと故郷に帰ってきた。

市外や県外の現住所が目立つ卒業生の名簿を見ながら、入田さんはつぶやいた。

「これだけの人が働く場所は、竹田市だけではまかないきれない。跡取りまでが出ていった農家もある」。

入田さんが生まれたころ、名子自治会は28世帯。今は21世帯に減った。嫗岳小が統合してできた祖峰小に、名子から通う子どもは2人しかいない。

④ 台風水害で地区に別れ

■エノハ泳ぐ清流

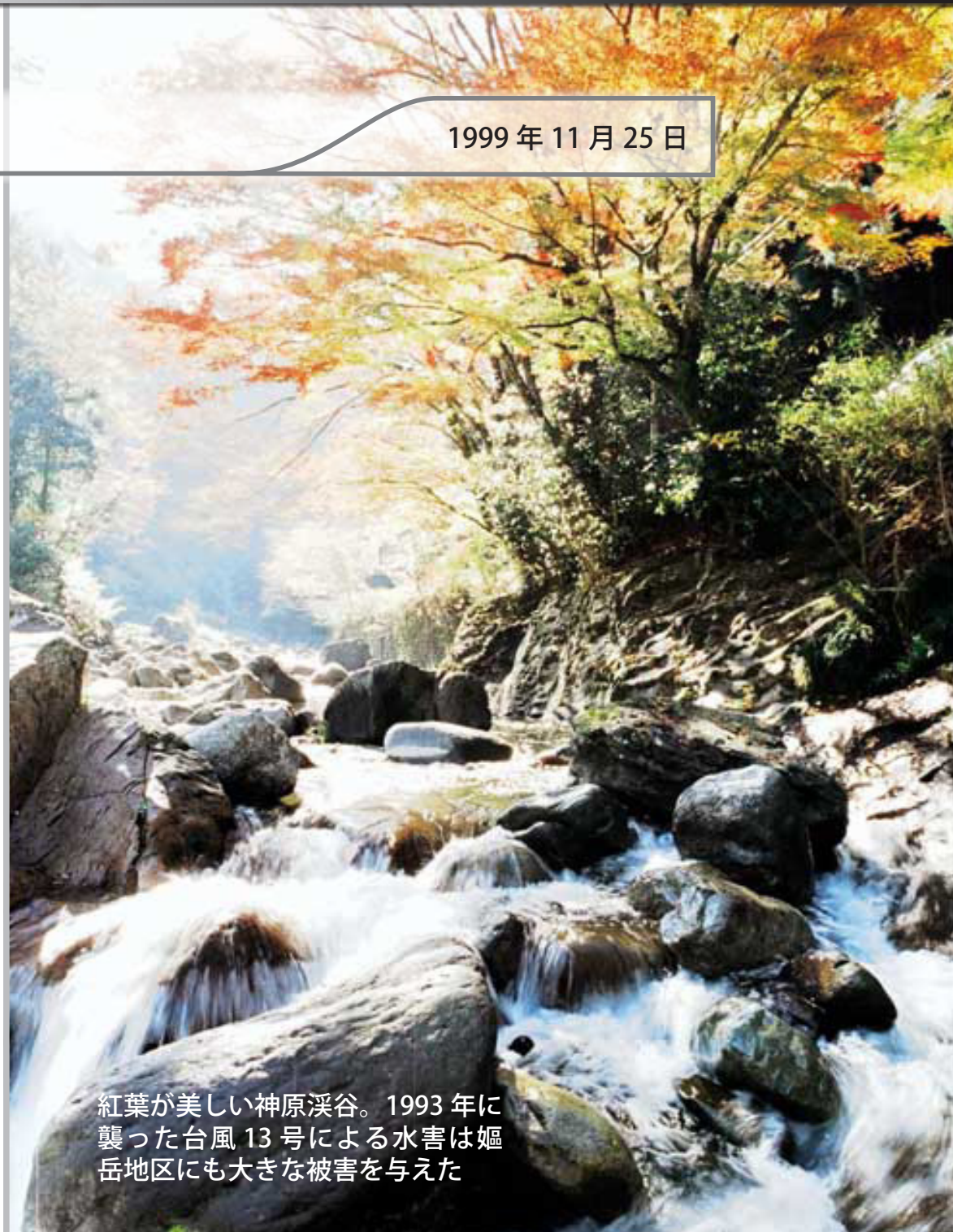
音楽物語「けやきとともに」。竹田市姫岳（うばだけ）小学校の子どもたちが、その思いをケヤキの木に託してつくった。廃校になる母校へ、それぞれの子どもたちが送る別れの歌。

（朗読）1993（平成5）年9月3日、大きな台風。
台風13号。

（全員で朗読）雨／雨／雨／川があふれ／川があふれ／水が／渦巻く／神原川／雨／雨／雨／郵便局も／家も／人も／流された／流された

姫岳を流れる神原（こうばる）川は祖母山系に源流を発する清流。エノハの魚影が水面に映る。毎年3月、九州一円から釣り人が神原溪谷に入ってくる。

1999年11月25日



紅葉が美しい神原溪谷。1993年に襲った台風13号による水害は姫岳地区にも大きな被害を与えた

清流もひとたび大雨が降ると、姿を一変させる。神原川の橋のたもとにある姫岳郵便局は、93年水害で濁流にのまれた。

姫岳小に通っていた子どもの家も浸水。水害の後、三世帯が地区を離れた。うち2世帯には就学前の子どもが計3人。ケヤキと一緒に遊ぶはずの子どもたちだった。

■複式にとまどい

(朗読) 90年、4クラス53名。子どもたちの数も減り、複式学級での学習がはじまった。

同じ教室で2学年の学習。となりの学年が気になってとまどうことも多かった。学年をこえて交わることもでき、学ぶことも多かった。97年、全校児童23名。急に淋しくなった。

今この複式学級は2学級。わたしはケヤキ。

みんなを見ていたケヤキ。わたしたちが芽を吹く春、子どもたちの声がわたしのそばから消えていく。

姫岳小学校閉校の日。今日1999年3月27日。

(合唱)「けやきとともに」

学校とともに／学校とともに／長いとしつき／校門の前で／大きな木になった／これからは会えなくなるね／忘れないよみんなのこと／これからも戻っておいで／忘れないで／ケヤキの木を

■「わすれないで」

ケヤキは子どもたちの“友だち”だった。姫岳小最後の卒業生・阿南沙織さん（現在、祖峰中1年）も、たくさんの思い出がある。

「いつもケヤキに登ったりして遊んでいた。大きくてほんの1メートルしか登れなかったけど忘れない思い出。夏は緑の葉がさやさやと

揺れ、木陰は涼しくて最高だった」。

(朗読) 嫗岳小学校とともに歩んだ 2482 名。

けやきはわたしたちに、季節を教えてくれた。

(合唱) わすれないでね／嫗岳のこと／わすれないよ／わすれないで／天に向かって／伸びること／わすれないよ／わすれないで／天に向かって／飛び立つことを／わすれないでね／嫗岳のこと／さようなら／ありがとう

(朗読) ぼくたち、わたしたちを、見ていて下さったけやきさん。ありがとう。ありがとう。ありがとう

沙織さんと同級生の井手真由美さん。6年生だった昨年の今ごろ、学校のみんなと音楽物語の歌詞を考えていた。歌の最後の部分は井手さんの受け持ちだった。

「ケヤキは子どもの声が聞けなくなるので寂しくなるだろう。『わすれないよ』、『わすれないでね』といっばい書いた」。

閉校式から半月後。中学校の遠足で嫗岳小に行った。旧校舎が見えると、2人はいつの間にか早足になった。人けが消えて寂しかった校門前で、以前と同じようにケヤキは2人を出迎えてくれた。

5 心触れ合う合同運動会

1999年11月26日



グラウンドゴルフの練習をするお年寄り。昨年まではこの輪の中に、子どもたちがいた（旧姫岳小学校のグラウンドで）

■優しい子に育つ

祖母山を望む竹田市神原（こうばる）地区の高台にある。旧嫗岳（うばだけ）小学校グラウンド。子どもたちに代わって、嫗岳地区グラウンドゴルフクラブのお年寄りたちの姿があった。

廃校になる前、お年寄りの輪の中には、嫗岳小の子どもたちもいた。毎週水曜日は先生の研修日。授業は午後の早い時間に終わる。放課後、お年寄りと子どもたちが一緒になって、ボールを追いかけていた。

「子どもたちは喜んでグラウンドゴルフをやっていた。覚えが良く、すぐ上手になった。家に帰って1人でテレビゲームをするよりは年寄りと遊んだ方がいい。優しい子に育つ」。クラブの会長をしている工藤昌行さん（74）は、子どもたちとのゴルフを楽しみにしていた。

「じいちゃん、ばあちゃん」と、孫のような子どもたちとの触れ合いと交流。どこの家の子

でも分け隔てなく、地域の人たちが子どもたちを温かく見守り、育てていく。そんな地域社会の関係が成り立っていた。

旧嫗岳小グラウンドの隅に、体育用具の倉庫がある。お年寄りたちのクラブに交じって、柄（え）の短いクラブがしまわれていた。子どもたちが使っていたクラブ。廃校以来、使われたことはないという。

■「手本になろう」

廃校になる前の2年間、運動会は小学校と地域が合同で実施していた。

1995（平成7）年から今年3月まで市公民館嫗岳分館長を務めた後藤惟敏さん（74）は、合同運動会の開催を学校に掛け合った。当時の校長から「子どもは子ども。地域は地域」と、いったん断られた。

校長が代わり、市教委が嫗岳小の統合を決めた97年に、再び合同開催を持ちかけた。校長

の回答は「OK」に変わった。

地区だけでやっていた運動会は、のんびりしていた。「出場者に集合をかけてから競技が始まるまで2、30分ということはしばしばあった」（後藤さん）。合同運動会になった2年間はほぼスケジュール通り、スムーズに進行した。

「子どもたちに迷惑は掛けられない。良い手本になろうと、みんな思ったのでしょう。時間厳守を子どもたちに教えられたようなものです」。廃校で地域だけの運動会に逆戻りした今年も、約束事は引き継がれ、予定に大きな狂いはなかった。

■「地域の学校」に

統合で新設された祖峰小の一宮順治校長は今年、旧姫岳小であった地区運動会に、審判長として招待された。児童の保護者を除けば、ほとんど面識はない。知らない人の中に入ることは少々気が重たかった。だが、行ってみて驚いた。

「酒でも飲まんな」。初対面の人から気さくに酒を勧められ、豪華な弁当も用意してくれた。姫岳の人たちの温かさを感じた。

旧入田校区にある祖峰小を、姫岳の人たちが地元の学校と思ってくれているだろうか。一宮校長は内心、心配していた。

「大事にされたのは私ではなく、祖峰小だと思う。学校がなくなっても、『地域の学校』と思って祖峰小を大事にしてくれる」。一宮校長は胸をなで下ろした。

⑥ 統合で得たものの失ったもの

1999年11月27日



規模が倍になり、笑い声も倍になった。新しい友達も、遊びもできた(祖峰小グラウンドで)

■今も「複式学級」

姫岳（うばだけ）小と入田小が統合して生まれた竹田市祖峰小学校。統合後も複式学級は解消されないままだ。2、3年生の国語の授業。教室の真ん中にある移動式の黒板が、2年生7人と3年生4人を仕切るついたて代わり。担任の赤木尚美先生が、黒板の向こう側とこっち側を行き来する。

まず、3年生に教科書を読むよう指示。2年生の方に行って教えようとする、黒板の向こうから「先生、声を出して読むの(?)」。間髪を入れず、「目で読んで」と、赤木先生が答える。授業も終盤。2年生が書いた文が、黒板に並んでいた。集中力が切れたのか、3年生の男子が1人、横目で2年生の黒板をのぞいていた。

「同じ教室で2学年の学習。となりの教室が気になってとまどうことも多かった」— 音楽物語「けやきとともに」にも、こんな一節があった。旧姫岳小の子どもたちも、同じ思いをして

きた。赤木先生は授業中、一人ひとりの机を何度も何度も回って歩く。横に立って個別指導をする時間も長い。子どものすぐそばに、常に先生がいる。「学級崩壊」といった言葉は、想像もできない教室風景だ。

■男友達ができた

小規模校では、男女のバランスが偏りがちになる。2、3年生11人の中で、両学年とも女は1人ずつ。統合前年の入田小5、6年生は逆に男が少数派だった。5年生も6年生も男は各1人ずつ。

旧入田小出身の6年生、広瀬佑太君は1年生の時からずっと学年では男1人。祖峰小になって初めて、同学年の男友達ができ、統合して6年生は倍の12人になり、旧姫岳小の男子3人と友達になった。

「男の友達ができ、よかった。キャッチボールができるようになったから」。佑太君は喜ぶ。

高学年になると男女が分かれて遊ぶことが多い。旧入田小では一つ上の学年も、男は1人しかいなかった。佑太君がキャッチボールをして遊んだ記憶は、あまりない。

■近い“心の距離”

統合によって、6年生の吉川両介君（旧嫗岳小）の登下校は、がらりと変わった。嫗岳小に通っていたころは、学校まで歩いて1時間。朝は6時45分に家を出ていた。「まだ暗くて周りがよく見えないこともあった」という。

統合で、今年4月からはタクシー通学になった。家を出るのは以前より30分遅い7時20分、10分でタクシー乗り場に着く。タクシーを降りれば学校の玄関前。通学は楽になった。

半面、帰り道の楽しみはなくなった。歩いていたころは午後4時に学校を出て、道草をして帰った。ちょっとした冒険や通学路での小さな発見が、両介君のひそかな楽しみだった。

今は授業が終わるとすぐ、タクシーが迎えに来る。家に帰っても近所に小学生は自分一人。「帰ってから友達と遊ぶことはない。勉強するかテレビを見ているだけ」。

統合しても児童数43人の祖峰小。先生と子どもの“心の距離”はまだまだ近い。少子化と過疎化によって、県内では学校統合が相次いでいる。統合で得たものと、失ったものが見えてくるのは、これからだ。

7 新たなよりどころ探して

1999年11月28日

■豊かさ教えたい

しゃれた和風のかわらぶき2階建て。築後わずか10年。竹田市姫岳（うばだけ）小学校の旧校舎は晩秋の日差しを浴びて、まぶしく輝いていた。

今年3月末で廃校になった後、市公民館姫岳分館になった。

二つの教室は畳敷きの集会場に衣替え。会合などに利用されている。地域の人たちによる跡地活用計画推進委員会が発足。学校に代わる、地域の新たな拠点づくりを模索している。

委員会の会長になった入田泰則さん（56）は、都

会の子どもに農林業や自然体験をさせる場のできないかと考えている。「もともと学校だった場所で農林業の良さや、田舎でしか得られない心の豊かさを、都会の子どもたちに教えたい。すぐには結び付かないだろうが、将来はきっと、



新築からわずか10年で閉校になった旧姫岳小

日本の農林業のため、嶮岳のためになる」。入田さんは委員会にそう提案してみるつもりだ。

■反対運動起きず

学校統合は児童・生徒や父母をはじめ、地域の将来や暮らしに、大きな影響を与える。過疎地域ではなおさらだ。

27年前の1972（昭和47）年。竹田市では中学校統合後の通学区をめぐる紛争があった。紛争は生徒をも巻き込んだ。旧入田校区の1年生17人が、登校を拒否。公民館で「寺子屋」方式の自主授業が一カ月近く続いた。

「寺子屋」騒動から四半世紀。再び統合問題はやってきた。嶮岳小の校区では、さっそく統合対策委員会が発足。校区のPTAや自治会の役員らが中心になって対応策を話し合った。市教委は将来の児童数推計を、対策委員会に示した。校舎を新築した89年当時の嶮岳小には、58人の児童がいた。それが、2004年にはわずか13人に激減する。児童数推計の数字は、ショッキングなものだった。

「勉強や遊びはどうなるのか。学校生活が成り立たなくなっ



畳の部屋に変わった旧嶮岳小の教室。週に1度磨き上げられ新たな出番を待つ

しまう」「子どものことを考えるべき」— PTAを中心に、統合賛成論が多数を占めた。「地域が寂しくなる」といった反対意見もあった。対策委員会は熟慮の末、「統合やむなし」の結論を出した。統合反対運動は起きなかった。

■ “新しい空気”も

入田さんの家の向かいに三年半前、東京から大石さん一家が移ってきた。巖さん（61）と妻裕子さん（53）、裕子さんの母親の3人。大手コンビニの重役を退職した後、3人が一致して選んだ田舎暮らし。

巖さんは好きな読書を楽しみ、ドイツ語を学ぶため週1回、大分大学に通う。姫岳地区社会福祉協議会の副会長も任された。無農薬の野菜にこだわる裕子さんは、菜園の野菜に付いた虫をピンセットで1匹、1匹取って、入田さんをうならせた。

姫岳地区から若い人が去り、そして学校がな

くなった。一方では、大石さん一家のような“新田舎人”が、ムラに新しい空気を吹き込み始めた。

ケヤキとともに79年間、学び、遊んだ学校。心の拠（よ）りどころでもあった学校が消えた今、地域の人たちの「新たな拠りどころ」探しが始まっている。 N

過疎化と少子化が同時進行する大分県。1989（平成元）年からの10年間に、分校を含む小学校27校、中学校7校が統廃合された（県教委まとめ）。

特に山間部の過疎地帯では児童生徒の減少は深刻。93年には中津江村、上津江村それぞれの中学校が統合、2村で1校になった。学校統合の波は、自治体の枠組みを超えるところまで押し寄せている。

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NANでは、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひNAN-NAN事務局にお寄せください。

NAN-NANでは、この「新田舎宣言」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック!!!

大分合同新聞社



別府大学

「新田舎宣言 — 地域社会再生のアプローチ」

第2部 ● けやきとともに

文：田崎 啓三、写真：椎原 新二

初出掲載媒体 大分合同新聞（1999年11月22日～12月19日）

《デジタル版》

2008年10月17日初版発行

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN事務局（〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社総合企画部内）

© 大分合同新聞社